

2 めざす子ども像に向けた授業実践に関する考察

(1) 授業の構想 「いいね、その攻め方(ボール運び鬼)」(第1学年)

① 本単元で求める子どもの姿

本単元は、規則を守りながら、鬼にはちまきを取られないように空いている場所を見付けながら攻めたり、逃げる相手のはちまきを取って自分の陣地を守ったりする学習である。日常の子どもたちの様子から、これまでの経験を生かし、夢中になって鬼から逃げたり、相手を追いかけてりする姿は容易に想像できた。しかし、1年生という発達の段階では、根拠なく無意識に動くことが多い。そこで、幼稚園で経験した鬼遊びや陣取り遊びの中で、無意識に行っていた「空いている場所を見付けながら」という視点を自覚する学びを仕組んだ。そうすることで、中学年のゲーム運動や高学年のボール運動において、空いている場所を見付けながら運動することにつながると考えたからである。さらには、中学校での球技において、空いている場所をつくり出すことにもつながると期待したからである。このような系統的な指導が「運動の楽しさや喜びを見出し、運動にかかわり続けていく子ども」の育成につながるのである。

② 本単元で求める子どもの姿を実現するために【支援】

- ア 単元のはじめに、いろいろな鬼遊びを紹介し、鬼からの逃げ方について交流する場を設定する。そうすることで、空いている場所を見付けるという視点をもつことができるようにする。
- イ 攻め方を工夫していたチームを見取った際、インタビューをしたり、価値付けたりする。そうすることで、無意識に行っていた連動した動きを自覚し、意図的に連動した攻め方をすることができるようにする。
- ウ 毎時間の振り返りで、気に入った攻め方を動作や言葉で紹介するように促し、周りの子どもに「どんなところがよかったか」を問う。そうすることで、攻め方を工夫することのよさに気付くことができるようにする。

③ 本単元の目標

- 意図的に攻め方を工夫し、空いている場所を見付けながら、速く走ったり、急に曲がったり、身をかかわしたりすることができるようにする。
- 勝敗を受け入れながら、競い合う楽しさに触れ、仲間と共に運動することのよさを膨らませることができるようにする。

(2) 学びの実際 ※波線は育てたい力を発揮して学ぶ子どもの姿、下線は前述の支援との対応を表す

① もっと鬼遊びをやりたいな [第1次の学び]

単元の導入では、「しっぽ取り鬼」「手つなぎ鬼」などの鬼遊びを紹介した。**【支援ア】**すると、鬼がいない場所を見付けて逃げたり、友達をタッチして喜んだりするなど、夢中になって鬼遊びを楽しむ姿が見られた。**【運動のもつ特性を見付ける力】**



鬼から逃げる子ども

その後、「ボール運び鬼」の行い方を紹介した。子どもは、個人で「ボール運び鬼」を楽しむことができた。振り返りで、T児が「鬼がいない所を見付けて走ったからゴールできたよ」と発言した。この発言をきっかけに、学級の全員が、空いている場所を見付けながら運動するという視点に気付いたのである。

② 攻め方を工夫したよ [第2次の学び]

第2次第1時では、試合後に話をしていたあるチームに、試合後の感想を尋ねた。すると、

K児は、「線を踏んでいないのに、相手チームに踏んだと言われて悲しかった」と答えた。その発言を聞いたM児が、「それだったら審判をつけたらいい」と提案した。また、T児は、「楽しかった。でも、得点できない人もいた」と発言した。この発言をきっかけに、チームみんなで得点したいという思いをもつ子どもが現れた。

そこで、第2次第2時では、教師が「チーム全員が得点したらボーナス得点10点」というルールを提示した。すると、ボーナス点を取りたいという思いを膨らませ、張り切る子どもの姿が見られた。実際にゲームをすると、ボーナス点を取り、喜んでいるチームがあった。一方で、N児のみが得点できず、ボーナス点を取ることができないチームがあった。そこで、攻め方を工夫するように促した。以下は、あるチームの作戦である。※映像記録、子どもへの聞き取りより

- A児：手をたたいて、鬼の気を引く
- E児：左右に移動し、鬼の気を引く
- T児：空いている場所を指指し、N児に伝える
- S児：空いている場所は見付けているが、なかなか走り出せない
N児の背中を押す
- K児：N児と鬼の間に入って（壁になる）、N児を進める



ゲームが始まった直後は、各自が点を取ることに必死であったが、N児以外の5名が得点した後、作戦を意識した攻め方が見られた。その結果、ゲーム終了間際にN児が得点し、ボーナス点を取ることができた。T児はN児とハイタッチをしたり、チームみんなでバンザイをしたりして、喜びを共有する姿も見られた。【運動の楽しさを仲間と共有していく力】

振り返りで、気に入った攻め方を紹介するように促した。【支援ウ】すると、M児（【支援イ】を行った子ども）は、得点した人が鬼を引きつけてまだ得点していない仲間を先に進める「おとり作戦」を紹介した。しかし、ハイタッチをするN児多くの子どもが「よく分からない」と反応した。そこで、実演するように促した。するとM児は、動作と言葉で「おとり作戦」の方法やその効果を分かりやすく伝えることができた。【運動とのかかわり方を工夫していく力】このことをきっかけに、子どもたちは攻め方を工夫することのよさに気付いたのである。

第2次第3時では、「おとり作戦」「せーの作戦」「かべ作戦」など、チームで決めた攻め方を進んで試すチームが多く現れた。

第2次第4時では、「ボール運び鬼オリンピック」をする中で、空いている場所を見付けながら攻めたり、素直に負けを認め、相手チームに拍手をしたりする姿が見られた。



空いている場所に走る子ども

(3) 授業の考察

学習の中で、多くの子どもが空いている場所を見付けながら攻めることができていた。しかし、「チーム全員の動きが連動した中でできた、または、つくった空間」というよりは、「偶然できた空間」であったように思う。【支援イ】を行うタイミングや形態を再検討する必要性を感じた。

単元をとおして、規則を守ったり仲間と協力したりしながらゲームを楽しむ姿、勝敗を受け入れたり仲間のがんばりを認めたりする姿が見られた。このような心の成長は、体育科に限らず、すべての教育活動に通じる重要な資質・能力であると考えている。今後も重要視したい。